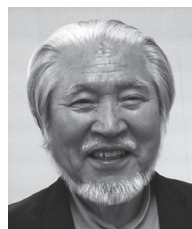


日本社会党青年部再考

『NO! 9条改憲・人権破壊』（明石書店、2007年）をもとに

——高見圭司氏に聞く（上）



——今日は高見圭司さんをお招きしています。経歴（次ページ参照）の中にもあるように、主として全国反戦青年委員会の設立というようなことで、当時からお名前は大変よく知られている方ですが、その実体はよく知られていないということで（笑）、今日はその辺のところを中心にお話を伺いたいと思っています。

生い立ち

——だいたい運動に関わるに至った経緯、あとは実際にどういう活動をされてきたのか。今お配りになりました経歴を若干説明するような形でお話をいただきたいと思います。それでは、経歴のほうからひとつ、よろしく願います。

高見 私は1950年に熊本の人吉高校を出ました。鹿児島、宮崎、熊本のちょうど境です。あそこから肥薩線が宮崎県に行きます。私の郷里は「五木の子守唄」からもっと先で、椎葉村というのがありますが、宮崎の「ひえつき節」の。くま川鉄道湯前線の多良木駅というところに私

の家があります。父が獣医をやっていて、母がお寺の娘でした。その息子として、昭和7（1932）年、つまり満州事変（1931年）の翌年に生まれました。1月23日。だから、ちょうど今月の23日で私は82歳になります。かなり年を取っていますが、まだ元気で、原発のこととかいろいろ運動はやっています。

つい先日の12月6日、日比谷野外音楽堂で、入りきれなかったのですが、集会がありました*。そのあとデモがあったのですが、真っ暗になりましたね。ここに傷がまだ残っているのですが、血が出ました。デモの最中、国会の正門からちょっと右の図書館のほうへ行く途中で、まあ、年なんですね、木の根っこに足を引っ掛け、バタンと倒れた。もう本当にひどかったです。

——機動隊に殴られたのかと思った（笑）。

高見 前頭をガーンとぶつけて、血がどんどん出ました。ただ、右手は押さえたようです。後で分かった。手のひらが黄色くなっていますからね。血が出ていた。私が旧制中学2年のときに敗戦です。13歳でした。あの敗戦で中学では剣道、柔道はやってはいけないうことになりました。だから、柔道ができなかったのですが、私はずっと柔道をクラブ的にやっていた。人吉

本稿は、2014年1月26日（日）に、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階、「中の1」会議室にて行われた、第11回社会党・総評史研究会の記録である。参加者は、有村敏克、五十嵐仁、中根康裕、園田原三、浜谷惇、兵頭淳史、細川正、栢田大知彦、米山忠寛、木下真志であった。事前に高見氏に送付した質問に答えていただいた部分と質疑応答の一部、質疑応答とに号を分けた。（木下 真志）

* 2013年12月6日、特定秘密保護法が参院本会議で採決され、自民、公明の与党の賛成多数で可決、成立した。日比谷野外音楽堂では反対集会が開かれ、約1万5,000人（主催者発表）が参加した。

に球磨川という、日本三急流の一つですが、大きな川が流れています。その真ん中に州があり、その州の中に、実は武徳館というのがあります。そこで柔道をやっていました。そのことがあるものですから、恐らく体が覚えていて手を突いたんですね。だから、もっとひどくなるかもしれないけど、手を突いていた。それでも2〜3か所、血が出てきていました。血管があるのですが、血管は大丈夫でした。友達が何人かおり、一緒に永田町の地下鉄のトイレに行きました。もうハンカチがすごいんですね、血が流れて。ただ、バンドエイドが3つばかりありましたから貼ったのです。脳内それ自体は大したことなかったです。

12月6日は秘密保護法反対の集会でしたから、そういうこともやりますし、そんなことで若いころからずっとやっていた反戦青年委員会の運動をいまだに続けています。

私の父は明治時代の生まれで、徳富蘆花(1868〜1927年、小説家、熊本県生まれ)を尊敬していました。大正12(1923)年に関東大震災がありました。ちょうど麻布獣医専門学校(現在の麻布大学獣医学部)というところの学生で、あの震災に遭って非常に苦労しました。このおやじがかなりリベラルというか、別に思想的にどうということではないのですが、やはり若い時代、あの当時の大正デモクラシー、ボルシェビキ、アナキーを含めたいろいろな論争の渦中を潜っているんですね。そういう空気

を持っていました。だから、大東亜戦争(太平洋戦争の日本側での当時の呼称)に対し批判的でした。あまり表立って言うとは問題なものですから言わなかったのですが、私なんかにはかなり話してくれました。

特に、私の家の本棚にたくさんあったのですが、徳富蘆花の全集の一つがちょうど空色のカバーなんです。あれは大正時代の本です。父はそれをずっと持ってきていて、私たちは小さいときから蘆花の『自然と人生』(1900年刊)を読み、「蘆花は立派だけど、あの兄貴(徳富蘇峰)はだめだ」と言っていました。僕は分からなかったのですが、国粹主義者で、日露戦争を支持するとか、そういう有名なジャーナリストだった。ところが、それに対し私の父は批判的でした。蘆花は『自然と人生』を書いて、非常にいい思想を持っている。蘆花がそんな思想を持っているのは、私はずいぶん後から、二十歳を過ぎてから蘆花の文章をちょっと読んだりして知りました。

徳富蘆花は、『戦争と平和』のトルストイの弟子なんですね。リベラルであるし、戦争に反対する思想をトルストイは持っているんですね。そういう雰囲気私の父は持っていたように思います。それが小さいときから何かと……。雑談のように言いますが、私が何で反戦青年委員会運動をやるのかということの問題は、そういうところにあるのではないかと私は思っています。つまり、おやじの教育がやはり

高見圭司(たかみ・けいし)氏 略歴

1932年 熊本県球磨郡多良木町に生まれる
1950年 熊本県立人吉高校卒業
1955年 早稲田大学第一政経学部卒業
1957年 日本社会党中央本部青年部副部長
1965年 全国反戦青年委員会設立を担う
1970年 社会党中央本部青年対策部長を解任される
同時に全国大会において、同志13名とともに除名される

1971年 参院選全国区に立候補・落選
1972年 新産別運転者労働組合に加盟
1994年 労組副委員長、のち執行委員8期16年間、統制委員4年間
1998年 高見事務所立ち上げ

以後、「スペース21」を東京・神田淡路町に立ち上げ、反戦・反安保・脱原発運動に取り組む。また、三里塚・沖縄問題を引き続き問い続け現在に至る。

強いですね。リベラルなんですよ。戦争はやはりだめだ。

私たちの仲間で同人誌のようなものを出して、毎回それに私の文章が出ています。この間書いたものは、戦争中、小学校5年ごろ、私の遊び友達が、「高見君、きみがこの間言ったあの言い方は流言蜚語だよ」と言ったのです（笑）。私たちの時代は流言蜚語という言葉があったんですよ。今度の秘密保護法の発想にはそういうところがあると思います。治安維持法的な発想があの中にあると私は思っています。その遊び友達私の家の近くで、父親が警察署長だった。恐らく、お父さんに話したのですね。「きみがこの間、何か戦争について言っていたことは流言蜚語だ」。私は怖かったですね、流言蜚語と言われることが。やはり、子どもながらに萎縮しました。そのことを、文章に書いておきました。

私の父はまた、長崎の島原出身です。隠れキリシタンの子孫です。自分の親戚などが原城（島原の乱〈1637年〉で、一揆勢の拠点となった場所）に籠もって虐殺されているんですね。その話をよくしていました。子どもも全部、徳川幕府に殺されるわけです。こういうことでおやじは、当時の徳川幕府と権力に対する批判は強かったように思います。表向きはないけど、戦争に対する批判もあった。しかし思想的には、蘆花のような、リベラルなものがあったのではないか。

当時の麻布獣医専門学校は港区南麻布にあって、北里研究所（現在の北里大学を含む、学校法人北里研究所）のすぐ傍です。だから、北里柴三郎（1853～1931年、医学者、細菌学者）の話をよくしていました。細菌学の話ね。おやじは、医学的にはそういう細菌についての思想が強かった。食べるものについても、例えば肉などでも熊本では馬肉を食うでしょう。しか

し、父は、私たち子供には、ナマの肉は……。

——馬刺しね。

高見 食わさないんです。うちの父も食わない。つまり、どういう細菌があるか分からない。火を通した牛はいい、豚はいい。しかし、馬はだめだ。そういうところがありました。だから、やはり北里柴三郎との関係があり、学生のころ細菌はかなり勉強していたのですね。同じ熊本だということもありました。おやじは長崎出身ですが、まず最初に獣医をやったのは熊本の球磨郡というところでした。

いろいろありますが、そういう意味で小さいときから、関東大震災の話だとか、おやじのちょっとした話が……。特に長崎で原爆があった後の敗戦後の占領下、父親が本を買ってきたんですね。その本は、写真と文で半分は長崎、広島、原爆です。あとの半分は南京、上海、特に南京の、日本の軍隊の虐殺を書いたものです。マッカーサー（アメリカの軍人。1945～51年の間、連合国最高司令官として日本に進駐）のときにはそういうことでないと本は出せなかったようです。それをおやじは買ってきて、長崎の原爆のことを知らせようと思いました。おやじの知っている人たちもずいぶん死んでいたようですから、私に「読めよ」と言って。

そういう意味で、原爆については長崎出身であるおやじの話を聞いていたこともあり、特に原水禁（原水爆禁止日本国民会議）運動にも直接、私は関わっています。だから、社会党本部の書記局にいたときに、原水禁大会のオルグでひと月ばかり広島に入っていたことがあります。反戦青年委員会をやるのもそういう流れがある。何も不思議ではないです。反戦青年委員会でベトナム反戦をやるのも原発反対も、私の運動はおやじの薫陶から全く自然なことです。

社会党除名される

高見 ご承知の方もあると思いますし、私の本の中にも書いていますが、1970年の社会党全国大会で、中央統制委員会によって反戦青年委員会の活動家13人の除名が決定されます。これは大会報告で決定されてしまう。その中に私の名前が入っており13名。実際は社会党の党員は12名でした。党員ではない者まで除名です（笑）。ひどい話です。むちゃくちゃなんです。慌てたのですね。つまり、その前の衆議院選挙で、百何十名の議席を持っていた社会党が70名ぐらいに激減した。江田三郎さんが書記長でしたが、社会党の指導部の責任だと僕は思っていました。

それと社会党の場合は「総評社会党」です。総評の太田薫―岩井章の路線ですから、ベトナム反戦闘争も彼らは中途半端です。僕らは追及したわけですね。職場で反戦青年委員会の若者が指導部を追及する。佐藤栄作（政治家。1964～72年の間、自由民主党総裁・内閣総理大臣）が東南アジア訪問のため羽田空港から出発するときに、我々はデモをかけます。

— 10. 8ですね。（1967年10月8日、第一次羽田事件）

高見 ええ。最初、デモをかけるといって総評の人が言っていたのに、やめろという指示を出すんですよ。もう僕は怒りましたね、「ふざけるな！」と言って。そういうことが重なっています。

もう一つは、「赤旗」（日本共産党中央機関紙）にむちゃくちゃ私たちの批判が書かれました。「反戦青年委員会というのはトロツキストの集まりだ」というレッテルを貼られた。トロツキーって僕はあまり読んだことがなかったものですから、何だろうと思った（笑）。後で勉強しましたけどね。トロツキストだという。「赤旗」

に私の名前まで出ました。「赤旗」は「社会党青少年局」というのはトロツキストの巣窟である」。私の早稲田の友人で「赤旗」の記者をやっているのがいて、彼は反党分子ということで除名されます。

最初に反戦青年委員会の批判を始めたのは「赤旗」です。共産党なんですよ。それで職場で民青（日本民主青年同盟。日本共産党の下部団体）がどんどん欠落していく。大衆的支持がなくなっていくんです。ベトナム反戦では反戦青年委員会やべ平連（ベトナムに平和を！市民連合）が一番闘うじゃないですか。ところが、そういう闘う反戦青年委員会が職場で広がって影響力が強くなっていくと、民青がどんどん減って力が弱くなっていったのですね。それで反戦青年委員会つぶしということになった。当時の宮本顕治体制とは、そんなものでした。

今でも僕らの裁判闘争をやると、共産党の弁護士さん、萩尾健太さんが支持してくれますから、そういう意味では、萩尾さんとは人民戦線で行きましようと言っている（笑）。反ファッショ。1935年のディミトロフ（1882～1949年、ブルガリア共産党指導者、コミンテルン書記長、首相。1935年のコミンテルン第7回大会で、反ファシズム人民戦線戦術について報告した）のね。あれは第三インターナショナルコミンテルンの書記長でしたからね。彼の反ファッショ、統一戦線の主張というのはもう歴史的な文書になっていますよね。あれで行きましようとは私は言っています。

ただ、私はまだ彼に言っていないんですけど、例えば共産党を僕が一番批判したのは、ソ連の核実験に対する態度ね。あれで1965年に原水協（原水爆禁止日本協議会）は原水禁とに分裂します。あの時に何と言ったかという共産党は、「ソ連の核実験は間違っていない」という文章を「赤旗」が書いて出した。だから、そう

いう意味では共産党の思想的な根拠として、不破哲三さんなども書いているけど、やはり生産力主義的な思想があると私は見ています。だから、原発も人類の生産力の前進だと捉えると、これはやはり支持すると路線的になるんですよ。共産党が政権をとったら、やはり原発もやらなければいけないし、原子力もやらなければいけない。原子力と人間とは共存できないなんていう思想はないです。やはり支持するというのがあったと思います。その当時は。

あの当時は共産党だけではないです。社会党の中にもそういう傾向が強く、原子力というのは将来的には人類の平和をもたらすものという、政策主義的に基づく思想があります。ただ、そういう誤りは私などもあるわけです。原発が平和的なものに使うというようなことで、テレビで『鉄腕アトム』*があると視聴率がよかった(笑)。原子力で飛んでいくわけですから、あれは正義の味方で、敵をたたきつぶした。あの当時、僕なんか原子力の平和利用ということはあまり深く考えていなかったです。ただし、核実験や原子力爆弾は断固として否定するのは変わらなかったのですが。

そういう内容があり、共産党が反戦青年委員会に敵対、ベ平連に対する敵対心を持っていた。私が共産党に対し非常に批判を持っているのは、反戦青年委員会を敵対的にやっただけではなく、原水協が分裂する根拠をつくったのは共産党ですからね。安井郁(1907～80年、法政大学名誉教授)さんがあのときの理事長です。こういう人たちがソ連の核実験を支持する。そのことの誤りをいまだに何にも正さない。これは労働者、民衆に対し不誠実です。やはりそういうことを昔の人は知っていますから、「何だ

よ。信用できないな」となる。だから、単に右翼的ではなく、やはり政党の原則からいって、大衆に対して過ちは過ちとして認めるのが当然じゃないか。そうすれば安心して支持できるわけです。僕なんか萩尾さんと一緒に共同戦線やれるわけです。今までやっているわけですからね。何も根本的に共産党を批判しているわけではないのです。そういう思想的なところで党の道義性が何だというのを、まだ私は問うています。萩尾さんとは1回、討論しようと思っていますけどね(笑)。そういうことがあります。

青年部専従として

社会党本部青年部専従(副部長)に選出された頃、60年安保の3年前、1956～57年ごろですか、青年部大会で選挙がありました。そこで私は青年部の専従の役員に当選します。

私は当時、人脈的に言えば河上丈太郎派です。浅沼稻次郎派なんですよ。だから右派なんです。もともと「私は左派です」というようなことは思っていませんし、それを隠すつもりもありません。例えば原子力関係などでも、中曽根康弘と一緒に原子力を推進した松前重義(1901～91年)さん。東海大学を創設した人です。戦争中の通信省工務局長で、大政翼賛会の総務部長です。クリスチャンですけどね。私は彼の国会議員秘書をやります。私は早稲田を出てウロウロやっていると、同じ郷里で、よく松前の国会に用があって行ったりしていた。そうしたら前の秘書が辞めるので次は誰にするかということで、秘書は2人の方がおり、その2人が「高見がいい。おまえ、秘書をやってくれないか」という話になったわけです。秘書も1年半ぐらいしかやりませんでした。青年部の運動で飛び回っていることが多かった。

島田正吾(1905～2004年、俳優。新国劇で活躍)の劇団で、松前さんの『二等兵記』を

* 手塚治虫が1950～60年代に発表した漫画、テレビアニメ。主人公のロボット「アトム」(atom:原子、原子力、核エネルギー)の動力が原子力。

原作にした芝居が新橋演舞場でありましたが、彼はクリスチャンだけあり、反戦的な思想が非常に強い人でした。平和主義的なところもあったりしました。松前さんが選挙のときに演説するのは、「日本が何で負けたか。やはり科学技術がアメリカやヨーロッパに劣った。だから負けたのだ」という思想です。それは生産力主義ですから、原発や原子力推進の思想になっていくわけです。そういう点では、科学技術が非常に大事だ。原子力をつくるときに中曽根が科学技術庁長官で、社会党出身の松前さんが衆議院科学技術委員会の常任委員長になります。だから、原子力推進の中心メンバーだった。そういう方でした。

松前さんがそういう立場になったということは、戦前の人ですから、私は分からないでもない。しかし考え方として、根本的に科学技術をよくすれば世の中がよくなるという政策主義は、やはり違うのではないかと私は今でも思っています。だから、秘書を1年半ばかりやりましたが、社会党青年部のこともずっとやっていましたものですから。それと、やはり河上派の先輩の三宅正一さん（1900～82年、社会党副委員長、衆議院議員、衆議院副議長）には非常に指導してもらいました。三宅正一さんが農民組合をやっていた。その農民組合の運動をボランティア的に僕はやっていました。

三池争議・三宅正一氏について

私が社会党の70年の全国大会で13人の同志とともに除名されたときに、社会主義協会派の諸君が敵対してきたのです。僕らは素手でデモをやっただけですが、彼らは鉄パイプを持って僕らに切りかかってきた。それで仲間の1人は車の中に押し込められて殺されかけたことがあります。誰を動員したかという、協会派が鉄パイプを持っている背後には、三池炭鉱の労働者がいます、100人ぐらい。何で彼らは、反戦青年委員会をやって除名された我々に敵対してきたのか。後で分かるんですけどね。大会の後、桧崎弥之助（1920～2012年）衆議院議員の部屋で会いましたが、三池の労働者に「あんたらの言っていることは正しい」、そういうことを言われた。

私たちは素手で、九段会館のところをずっと、デモをやったんですね。これは私の本にも写真が出ていますが、デモをやって、それだけしかしなかった。そのときに、三宅正一さんの話では、反戦青年委員会を支持する労働者の人とか、良心的な人々が僕らの除名に反対しているというのです。例えば、弁護士の中村高一代議士（1897～1981年）。彼は同じ武蔵野で、私は武蔵野総支部の書記長もしていましたから親しかったのです。それでテレビに1回出て、何で社会党は反戦青年委員会を除名するのかというので。あのとき、反戦青年委員会を支持するのはあと誰だったか。読売の論説委員をやった宮崎吉政さん（1915～2006年）との懇談会がありました。

「高見君たちを何で除名するんだ」と言って怒っていました。そのようにマスコミの中でもね。それと同じで三宅正一さんがやはり、「反戦青年委員会を除名するなんてけしからん」と思っている1人だったようです。それで私たちが途中で休憩の時間に仲間たちとおりましたら、三宅さんが来ました。三宅さん自身が私たちのところに来ること自体が反戦批判派の諸君に非常に恨みに思われています。社会主義協会派とか、成田系の連中とかね。佐々木更三の系統もそのころは、反戦青年委員会の除名に反対しませんでした。彼らは最初は一時、反戦青年委員会を支持していました。ところが、後で全体が……。総評も「赤旗」などで「反戦青年委員会はトロツキストの巣窟だ」なんて書かれる

と、やはり反戦青年委員会を支持しなくなってしまう。社会党の選挙で負けたものだから、「ああいう反戦派の行動がだめだったのだ」という、マスコミの空気がありました。

三宅さんたちは僕らが除名されてデモやったのを見ている、議員団で。見ている人たちは支持する人たちです。部落解放同盟の松本治一郎さん（1887～1966年）などは僕らを支持した。それから、日本婦人会議の松岡洋子さん（1916～79年）は断固として僕を支持していました。あの人は神田に事務所を持っていて反戦青年委員会の勉強会というのがあり、私は何度も呼ばれています。松岡洋子さんなどの支持もあり、私が除名されたら、松岡さんが日本婦人会議議長を辞めてしまいます。あのときにずいぶん辞めました。社会党系の婦人会議。それから、日中友好協会をやっている人たち、救済会をやっている人たち。社会党を支持している、ベトナム反戦を闘った人々がドーッと辞めてしまう。私は辞めてほしくなかった。残ってやってほしかったんですけど。

そういう時に、まず三宅正一さんは出てきて「高見君、大丈夫か?」。あのとき、新聞にけがしている私の写真が出たのです。つまり、協会派の連中に引きずり込まれて僕が殴られているんです、テロで。大したことはなかったのですが、引っかけ傷みたいなのがあり、「高見圭司殴られる」と朝日などにも大きく出ていた。それで三宅正一さんは、やはりたまらなかったんでしょうね。「高見君、きみ、元気か?」と僕の肩を抱いて言うから、「先生、大丈夫ですよ」と言って、そういうことがありました。だから、社会党の中でもかなり支持者がいた。だって、除名をした張本人であると言われる、当時の書記長の江田さんが僕らを支持していたんですよ。「反戦青年委員会は断固としてやれ」というのは江田派の人たちです。だから、反戦青年委員会は社会

党の中の構革派だ、と言われていました。共産党は構革派って言えないものだからトロツキストだと言っていた。そういうことがありました。

党内の確執

エピソードばかり話して、こんな話でいいのかと思いますが、実は除名された大会で向坂逸郎社会主義協会派は、反戦青年委員会に敵対するということだった。社会党の中でも反戦青年委員会はどんどん伸びるばかりですからね。共産党だって民青がどんどん減る。大学でも平連が増えるわけです。そういう中で反戦青年委員会をたたくというのが、総評の幹部も社会党の幹部も含め、一致してきたということがあります。

しかし、大会があった九段会館の前で私たちがデモをやったりしていて、実はトラブルがあったのです。大会が終わった後、福岡県本部の部落解放同盟出身の党員が「高見、いるか」と言って探しに来たんですね。その連絡が来て、私は会わなかったのですが、「反戦青年委員会の連中は部落解放同盟の同志に対し暴力を振るった。許せない！ 高見、来い」という話です。「どこに来いというのですか」「大会の翌日、午後1時、衆議院会館の榎崎弥之助の部屋へ来い」。こういうことです。榎崎弥之助さんという方は松本治一郎さん（1887～1966年）の娘婿ですからね。松本さんは部落解放同盟出身の国会議員です。しかも反戦青年委員会をつくるときの青少年局長でもあった。私は青対部長でしたから私の上司でもあったんですよ。その部屋に来いというわけです。

何でそんなに僕らが呼ばれたのか、調べたのです。そうしたら、玄関口に協会派がいて、私たちはデモ隊で横っちょのほうにいた。実は大会に来ていた1人が、いまだにそれが誰か分からないのですが、その真ん中を通して協会派を

批判して怒鳴りあげたのですね、「おまえら、何だ！」と言って。その人がバーッと取り囲まれて殴られたのです。この人は反戦青年委員会を支持している人ですよ。あるいはジャーナリストかもしれません。それが殴られてけがをするわけです。その助けに入るんですよ、何人かがダーッと。

助けに入った中に1人、東大の学生で反戦青年委員会をやっていた浦井君というのがいた。この浦井君が突入するわけです。そうしたら榎崎弥之助の秘書が、殴られている人を助けに入っているんですよ。それは調べた結果、後で分かるのです。両方とも助けに入っている。ところが、部落解放同盟では榎崎弥之助の秘書に暴力を振るったとなってしまう。福岡社会党の県本部の大会代議員の人たちが「高見、来い」ということになった。調べたらまるっきり誤解なんですよ。「浦井君、どうなんだ？」と聞いたら、「いや、そんなことはない。俺は突入して助けに入ったんだ」。向こうも助けに入ったというので分かってきたのです。そういうことがありました。ところが、もみ合いになるものですから、両方で殴り合いになったとなり、福岡県本部の人たちは「部落解放同盟に対し暴力を振るった。けしからん。許せない！」といって糾弾です。そういうことになったのです。

それが翌日の午後1時からの、榎崎弥之助の部屋での会議になったのです。私と私たちの仲間の3〜4人、それから70歳代の、社会党の東村山の市長選挙に出られた佐藤敏勝さんという方にも一緒に行ってもらい、榎崎弥之助の部屋で待っていたのです。1時に集まれというのがなかなか来ないのでどうしたのかと思ったら、しばらくしてドヤドヤッと福岡県本部の人たちが入ってきましてね、部落解放同盟の人たちが。「いやー、すまない。申

し訳ない。今ね、笠原を殴ってきたから」。こう言うんですよ。笠原というのは総務局長です。機動隊を呼んだようですよ。あの集会、機動隊を呼ぶんですよ。僕らがデモをやっている。だって、権力と対決する社会党が機動隊を呼ぶというのは犯罪的なんですよ、常識的に言っても。それを部落解放同盟の人も調べた。「誰が呼んだのか」「社会党中央本部総務局長の笠原だ」。彼は前に労働局長もやるのです。なかなか人のいい人物だったのですが、機動隊を呼ぶということになると、やはり執行委員会の決定でしょうね。

ただ、笠原を殴ってきたということは言っていました。僕らもびっくりしました。福岡の代議員＝部落解放同盟の人たちは、「いや、やつが実は機動隊に連絡したんだ。あれはふざけたやつだ」。だって三池では機動隊と闘って、三池労組の組合員が殺されているわけだから、もう許せないわけです。機動隊を社会党の大会に呼ぶ。しかも彼らは、反戦青年委員会と言わない。「反帝学評が実は社会党を破壊に来る」と宣伝している。だから「社会党を破壊するんじゃ許せない」というので、やはり三池の労働者が来るわけです。それで「反戦青年委員会憎し」です。これは学生の組織だと思っている。僕らは学生だけじゃない。あの当時、僕は39歳です。いいおっさんです。それで分かって、「笠原を殴ってきた」。どの程度殴ったかは知りません。それからもう話ががらっと変わり、「あんたらの演説は良かったばい！」と褒めるのです。「高見さんね、今度福岡に来たらずい僕のところに来なさい」。そういうことになりましたが、社会党大会でも現場のこういう闘いとなると、いろいろなことがあるなと思いました。

——どうもありがとうございました。

質疑応答

——最初に2点ほど補足していただきたいと思います。一つは、どういうことをきっかけに社会党に入党されたのか。お父さんの影響などもあったという背景についてはお話をされましたし、社会党の中での活動についても話があったのですが、その途中が抜けているので補っていただければと思います。それから、1965年に全国反戦青年委員会設立を担うということですが、簡単な経緯、どういう経過で高見さんが具体的にその中心になっていったのか。この2点です。それとその後、「高見圭司氏の質問事項」として9点（後述）出ているので、お答えできる範囲で順番にお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

高見 分かりました。簡単に説明していきます。

学生時代回顧

——その前に社会党入党の経緯。これは早稲田のときですか。

高見 いや、学生のときは、入党はまだしていなかった。私は早稲田に入学して九州から来ているものですから、言葉がなかなか東京弁に慣れない。訛りがあるものですから、ちゃんと正確な言葉になるようにしたいというので雄弁会に入ります。

——早稲田の雄弁会ね。

高見 はい。雄弁会で全国から来ている面白い仲間たちと会い、かなり啓発されました。それが一つ。それから、一年半経って新建設者同盟という組織を立ち上げます。

建設者同盟の流れというのは、実は早稲田の先輩では浅沼さんとの関係が強かった。浅沼さんの、あの江東区のアパート。アパートと言ったってあの当時はなかなか立派な鉄筋のアパー

トでしたが、何回か僕は浅沼さんを訪ねていきました。あそこの書生が長野出身の西沢君といて、早稲田の私の同級生です。後で全通（全通信労働組合）の書記局に入りますが、この西沢君がいて、本がたくさんある。そこで彼は寝起きしているわけです。行くとごはんが食べられるものだからよく行きました。だから私は、浅沼さんとは個人的な付き合いが深かったんですね。奥さんもよく知っている。そういう経過で浅沼さんとの関係が深い。

建設者同盟の学習会などをやると、いい先生がいらないものだから、『共産党宣言』とか『空想から科学へ』*とか、そういうのを自分たちで読み合いました。それから、毛沢東の勉強をしました。実践論・矛盾論を学習していました、僕らは。そういうこともやっていました。もちろん、社会民主主義的な内容もやりました。社会主義の学習会というので、先ほど言ったような勉強会もやっていました。

例えば、連合の会長をやった芦田甚之助君（1934～2011年）は建設者同盟の僕の2年後輩です。彼が連合の会長になって祝賀会を霞が関ビル35階の東海大学校友会館でやったときに、僕が「学生のときに『空想から科学へ』を報告することになっていたのに、君は全然ちんぷんかんぷんで報告できなかったじゃないか」と言ったら、「高見さん、僕がそんな勉強するはずがないじゃないですか」と言って大笑いになりました（笑）。それから、法政大学の名誉教授の袖井林二郎（1932年～）。クラスは違うけど、早稲田の政経学部の同級生です。去年、

* 『共産党宣言』：マルクス主義の基本文献にして、歴史的文書。マルクスとエンゲルスが1847年に起草、翌年発表。『空想から科学へ』：マルクスが「科学的社会主義の入門書」と推奨したエンゲルスの著作。

ここで出版記念会をしました。それから、私の郷里の、熊本の人吉高校出身が5～6人ドックと入ってきました。あとは商学部の諸君がずいぶん来ていました。商学部は、佐野学さん(1892～1953年)といって共産党をつくった人がいるでしょう。あのころはまだ早稲田の教授をやっていたんです。先生を慕っている商学部の連中が、やはり建設者同盟に入ってきました。だから傾向としては、いろいろなことは勉強しましたが、人的な系列から言えば社会党右派系です。西尾派はいなかった。河上派です。浅沼さんの系統でずっと来た。

私は単位が足りなくて1年間延び、5年間いました。卒業するのがちょうど1955年ですか、社会党の統一大会の前です。卒業して大会前に、麻生久(1891～1940年)の息子の麻生良方さん(1923～95年)というのがおり、民主社会主義連盟というのがあったのです。後で民社党へ行きますけどね。彼が文京支部の書記長をやっていて、書記になれと言われた。当時、給料が7,000円で、食えなかったですね。

——社会党の文京支部ですね。そのときに社会党に入ってきたということですか。

高見 ええ。もう社会党に入党していました。統一した前後ですからね。

——では、大学卒業と同時にぐらゐに社会党に入った。

高見 卒業と同時に社会党には入党して、麻生さんの支部に入っているわけです。経過的には、そういう建設者同盟と社会党の浅沼さん系統との関係が深かったということがあります。

——今の経歴についてですが、ご著書では、卒業の前に浅沼さんに「新聞記者になろうと思う」と言ったら、「追っかける仕事より追かけられる仕事をしろ」と言われて、それが大変衝撃的で……。

高見 そうそう。人生変わっちゃったですね。

——それが大学の5年生ですよ。

高見 そうです。

——と書かれた後に、「その後、私は浅沼書記長の下、社会党員としての活動が続けることになった」という一文があります。

高見 そういう経過でした。

——ということは、この時点ではすでに入党されていたようにも読める記述です。どの時点で入党されたという明確な記述がないのですが、だいたい大学の4年生、5年生ぐらいだと理解してよろしいですか。

高見 そうですね。私もよく覚えていないんですよ、何月何日に入党したとはね。ただ、入党の証明書がありますから、書いていたと思います。それで浅沼さんも含め、文京支部へ書記で行けということになり、文京支部の麻生良方さんのところで働いたということです。

——この経歴を見ると、1957年にはすぐに中央本部青年部副部長ですよ。たった2年間でそんなに出世したのですか。

高見 選挙で当選していますからね。私は、浅沼、麻生の流れで青年部大会での選挙で、副部長に推されて立候補しました。副部長の候補は3人でしたが、鈴木派、河上派両主流の推薦というので、私が多数で当選したのです。

反戦青年委員会

高見 それは本にかなり詳しく書いてあります。反戦青年委員会をつくる経過は、私が社会党青年部の青対部長のときに青少年局長だった榎崎弥之助さんを口説いたのです。「青年対策委員会をつくりたい。そこでいろいろなことを討論して、運動方針を決めたい」「ああ、いいよ。高見君、全部やれ。ハンコはもうきみに渡すから、これで会計からカネを取れ」と言って財政的にも全部任せてくれて、反戦青年委員会のいろいろな文書なども社会党の会計からカネをど

んどん引き出してやったのです、ポスターからパンフレットから。そういうことで青少年局の青対部長になり、そうして何をやるかというので、やはりベトナム反戦をやるという点を私は決意しました。

ちょうど私は、書いておきましたが、総評の青年部とか、いろいろな文化団体を含め、党とは別に「平和友好祭運動」をやっていました。これは大衆的な平和運動です。何せ青年部が山中湖に5,000人ぐらい集めるんですからねえ。すごいんですよ。記念講演に江田さんと呼んだら、江田さんが喜んで。それ以来、江田さんは、とにかく私に「反戦青年委員会をやれ」と言って支持するんですよ。江田書記長の下で私はクビになりますが、江田さんは終わってからも貴島正道さん（1918～2008年）に言っていたそうです。「高見君、今、どうしてるかねえ」。貴島さんは、「高見君、江田がこの間、きみがどうしてるって聞いていたよ。きみは全国区の参議院に立候補したけど、俺は投票したからね」と言っていました。そのように私は江田派との関係も深くなっていました。それは反戦青年委員会の流れの中で、です。

反戦青年委員会はそういうことで平和友好祭運動の流れで、やはり統一戦線なんですよ。つまり、私はもともと党派主義ではないのです。「反戦をやる人は、神を信じる者も信じない者も全部来い。どこの党派でもいい」というのを私は打ち出すのです。だから、民青にも私は呼び掛けた。ちょうど民青は安保改定阻止国民会議というのがあり、その会に私はいつも出ていました。私が出ていった立場は、安保改定阻止青年会議というのをづくり、民青、社青同と。社青同はまだできなかったですから、社会党青年部ですね。専断的に私が出ていたのです。

だから、安保改定阻止青年会議をやる一方、平和友好祭運動をやり、「党派は関係ない。支

持する人は全部集まれ」というのを私は大胆に提起したのです。私はそういう意味で党派的な色が弱かった。解放派のことが書いてありますが、私が解放派に入らないかと言われたのはずっと後ですから、まだ私は解放派でもないのです。むしろ反戦青年委員会をやっていて、後で出てきますが、私は『根拠地』という雑誌をつくっています。私が言ってカネを出し合い、池袋にアジトをつくり、そこで毎月、月刊誌を出しました。全国3,000部ぐらい。

そのメンバーも平和友好祭運動をやった、全国の総評の青年部関係です。だから組織が広がるはず。内容は全部、総評の指導部批判ですから、岩井や太田はいやがります（笑）。共産党も反戦青年委員会を批判した。だから太田、岩井派、特に社会党内の社会主義協会派はこれをえらくいやがりました。そういう中でむしろ、「あれは江田三郎の構造改革派の組織だ」みたいに言われています。

反戦青年委員会はそういう経過の中で、平和友好祭、その他青年部のやっているさまざまな運動を引きずって、人的にも重なり合っていました。それで反戦青年委員会をつくり、1965年の8月30日に結成総会をやります。そこに来たのが30数人です。労働組合の青年部の指導部、それから民青の中央委員の3人が来ました。

反戦青年委員会をつくる時に論争がありました。つまり、社青同の中でも第四インター系の諸君は、実は反戦青年委員会をつくるのに消極的だったのです。どう言っていたかという、『安保改定阻止青年会議』の再建をすればいいじゃないか。別につくることは必要ない」。民青も同じことを言っています。民青と第四インターはそう言っていた。私の考えは、「60年安保を引きずる必要はない。それをまた超えて、党派を超えた青年労働者でやろう」と。それで

高見圭司氏への質問事項

——『NO! 9条改憲・人権破壊』*を中心に——

1. 早大「新建設者同盟」は、32頁(『NO! 9条改憲・人権破壊』の頁。以下同じ)の記述と写真を見る限り、右派の色彩が相当強かったようですが、その後早稲田解放派の核になっていくとのこと。この「左旋回」はいつどのように起こったのでしょうか。そこに高見さんご自身はどのようにかわっておられますか。

2. 1955年から社会党文京支部書記として活動しつつ、砂川闘争**に参加しておられます。前後の記述を読む限り、この時点では高見さんご自身は右派人脈とのつながりが強いようですが、にもかかわらず砂川闘争に積極的に参加するに至ったのは、何かきっかけがあったのでしょうか。

3. 「社会党青年部」「社会党青年対策部」「社会党青少年局」「社会主義青年同盟」の組織的關係を整理してご説明いただけませんか。

4. インターネット百科事典 Wikipedia の「社青同解放派」の項目には、「1960年2月27日 日本社会党本部2階で日本社会主義青年同盟学生班協議会の結成が行なわれる。(これは前年来、早稲田大学を中心として活動してきた、東京社会主義学生会議が、社青同の組織に発展的に転化したものである。)」とあります。この記述は正確でしょうか。また、高見さんはこの動きにかかわっておられましたか。

5. また同じく Wikipedia の「高見圭司」の項

目には、「1957年：社会党中央本部青年部副部長に就任。党内では江田派に属したが、党内に非公然フラクション「高見派」を作る」。との記述がありますが、事実でしょうか。41頁には副部長選出は58年4月とありますが。

6. 解放派への正式参加は、99頁では社会党除名後の1970年とのことですが、高見さんと解放派との関係が対立から近いものへと変わるのはいつ頃のことでしょうか。

7. 雑誌『根拠地』は財政的にはどのように支えられていたのでしょうか。社青同や反戦派以外の社会党員や党幹部にも支援者がいたのでしょうか。

8. 105頁で、70年の「反戦ページ」は69年末の総選挙敗北を受けてのこととありますが、高見さんら反戦派を排除するという組織方針は選挙後急速に出てきたものでしょうか。それともその前からほぼ形成されていたものが、選挙総括を口実に具体化されただけなのでしょう。

9. 新運転加入の経緯について

* 高見圭司著『NO! 9条改憲・人権破壊—反戦青年委員会をつくった軍国少年』明石書店、2007年5月

** 1955年、米軍立川基地の拡張計画が明らかになり、当時の砂川町(現東京都立川市北部)の農家ら住民が反対同盟を結成。警官隊とたびたび衝突し、56年10月には1千人を超す負傷者が出た。米軍は68年に、国も閣議で69年にそれぞれ計画中止を決め、立川基地は77年に全面返還された。(出典：朝日新聞掲載「キーワード」)

提案したら、バーンとみんな拍手です。圧倒的に強いんですよ、出席者は。それで民青の3人の中央委員は席を立てて帰りました。あと第四インターの諸君は、その後、一緒に反戦青年委員会をやりました。

質問への回答

——それでは、質問事項について簡単にお答えいただければと思います。

高見 最初の早稲田の解放派との関係ですが、だいたい私は社青同の中では、人的な系列とい

うと社会党の浅沼系統の流れです。それから、途中で江田さんとの関係も非常に深いですから、江田派と目されることもありました。私は社会党の中の派閥に積極的ではないんです。いつも大衆運動が中心です。だから、社会党青年部の文京支部の書記をやっているときは、砂川闘争なんて行くものがないなくても、いつも私は旗を持って行っていた。麻生書記長からは、「高見君、きみは砂川闘争ばかり行ってるけども、砂川ばかり行ってはだめだ」といって弾圧がかかっていた。それでも、私は許さなかったの

す。毎日行っていました。そういう大衆運動を本当に考えるのがずっと私の考え方で、党派の中で何かやるようなことはあまり好きではなかったです。

社青同をつくったときに、佐々木慶明君（1934～1999）が学対部長で、私が政治共闘部長になったのです。社会党の青年部の副部長でいながらね。私と佐々木慶明君はいつも意見が合うんですよ。社青同の全体の委員長から書記長は構革派で、江田派ですが、例えば憲法公聴会阻止闘争を僕らはやりました。あのときに佐々木慶明君と私の2人が、憲法公聴会阻止闘争の集会、デモ行進をやろうと提案をするわけです。あとの執行部の連中は誰も賛成しない。

佐々木君は思想的に解放派の創設者ですからね。ペンネームは滝口弘人といいました。私とはそういう意味で自然な、実戦の中での友人、同志関係が成立していくわけです。だから、早稲田の建設者同盟をやっているときは解放派との関係はもちろんありません。卒業してから佐々木慶明君は、早稲田にいる社会党の牛越公成君（1940～91年）と一番関係があり、早稲田の建設者同盟の学生が勉強会をやるから来てくれというので、佐々木君が行ってよく勉強会で教えていました。それが解放派になってしまいう。早稲田の建設者同盟は解放派です。そういう歴史があります。そのとき、私はまだ解放派でもないわけです。実際、運動では、佐々木君と私とは非常に気脈が通じ合う。あまり党派主義的ではないところがありました。

まだいろいろありますが、解放派との関係ではそういうことですね。

——1番目の点はそれでいいのですが、今の話に関わって、砂川闘争への積極的な参加ということですね。普通だと当時のポストとか経歴からして、砂川闘争にはそんなに積極的に行くと言われたともおっしゃっていたのですが、

端的に言ってどういうきっかけだったのでしょうか。

高見 砂川闘争は、もうすでに私が社会党に入ったときは社会党は党決定で、積極的にやることになっていました。それで文京支部から何人かと私が旗を持っていくわけです。そのうちに社会党のおっさんたちはなかなか行かないじゃないですか。僕はずっと1人でやっているわけです。機動隊に蹴飛ばされたりしながら闘っている。そういうのがずっと続きました。反戦青年委員会のときも砂川闘争はずっと続けてやっています。

——党としての機関決定のようなものは……。

高見 ええ、出発はね。最初は恐らく、社会党の中央本部の大きな宣伝カーがあるでしょう、あれに何人か乗って行ったと思います。書記局も含めてね。だから、行き始めたのは、僕が勝手にやるわけです。考えてみたら、書記長の麻生良方にももうあまり砂川に行くなと言われても、そんなこと振り切ってやっているわけですから、普通、組織的にはおかしい話ですよ（笑）。でも平気でやりました、私は。

——当初は、浅沼派だとか河上派だとか、比較的社会党の右のほうの派閥だった。

高見 ええ、そうです。

——あまり思想的な背景をもって、そういう右派のほうに行かれたわけではない。

高見 いや、思想的には勉強しました。

——では、河上派や浅沼派などの右派的な主張に同調した。

高見 ええ、それは一時ありました。特に何があったかという、麻生良方さんが民社連という事務局をやっていて、あの民社連に私がボランティア的に時々行って、手伝っていたんですよ。だから、それはそれとしてある。それから、思想的にはいわゆるデモクラティック・ソー

シャリズムです。

——では、浅沼さんなんかの言う民主社会主義、あるいは社会民主主義的な考え方に対する同調だった。

高見 同調というか、勉強しました。しかし、最終的には具体的な運動で人は決まるものですね。僕はあまり観念的な人間ではないですから。思想的にこれが正しいからこうしますと考えてないんですよ。

——いろいろな行動優先で行動しているうちに……。

高見 行動している。

——考え方も変わった。

高見 そうそう。考え方が変わりますね。もう全部そうです。私の場合、本も読みますが、トロツキストだと言われて、それからトロツキストを勉強するわけです。でも、実際は運動が先験的にあります、私の場合。それで道を選んでいく。そして、これは正しいというふうに来たと思います。

そういう意味では、河上派の人たちとも途中で疎遠になりました。派閥的には疎遠になります。あるいは江田三郎さんの江田派の関係も、反戦青年委員会をやるという意味では一緒だけれども、実際はやはり疎遠になります。どんどん左に行ってしまう。だから、みんな言うんですよ、高見は右から左へ過激派になった（笑）。それで私はいいと思っている。「まあ、そうだな。運動でそうなったのだからな」と思っていて、弁解も何もしません。

——構造改革論についてはどうですか。

高見 構造改革論は、特に私はグラムシの思想をいまだに支持しています。グラムシはいまだに読んでいます。

——思想的な面でもやはり、構革派ということで位置付けられていいということになりますか。

高見 あの当時、河上派の民主社会主義も理論的にはやはり満足できなかったですね。それから、実戦的にもできなかった。特に三池闘争が敗北した後の路線をめぐって、実は構造改革派が出てきますからね。それで江田派の佐藤昇さんなどと勉強した。それと『国家独占資本主義論』を書かれた井汲卓一さん（1901～95年）。この人の学習会に僕らが参加するとか、かなり理論的な勉強をしました。井汲さんの本も読みましたし。

——「構革三羽鳥」と言われている貴島正道さんとの付き合いはかなり……。

高見 ええ、貴島さんとはね。

——あとのお2人とはあまり関係ないのですか。

高見 森永栄悦と加藤宣幸。それは、僕は付き合います。付き合いはありますが、森永なんというのは全然だめです、思想的に（笑）。僕は中野まで途中だったから、「モリさんよ、ちょっと一緒に飲みに行こう」と言うと、あいつは逃げるんですよ、怖がって（笑）。本当に逃げたんですよ。中野で逃げましたね。「ああ、やはり満州の軍官学校なんかに行ったやつはくだらんな」と思いました。

ただ、貴島さんには理論的にずいぶん学んだというか、むしろ貴島さんとの関係というのは、武蔵野総支部の後藤喜八郎（1920～2007年）が市長（1963～78年に在任）で、実川博さんが都会議員で、市会議員が12名ぐらいいました。大きかったですよ、あの当時。市長を取っていますし、都会議員も1人取っている。あのころ私は武蔵野総支部の書記長です。オルグが2人もいるのですから。車も持っていますし、いい活動をやった。

あの中で実は貴島さんから、「高見君ね、1人いい女性がいる。共産党系の新日本婦人の会に所属しているらしいけど、社会党から市会議

員に出たいと言っているから公認にしてくれ」という話があったわけです。それで支部の執行委員会で大激論した。僕は押し通したんです、採決までして。市会議員クラスというのは女性の議員が2人おり、永井しず子さんというのともう1人、斉藤ふさえさん。それで共産党系の人を入れるのは反対だといってやっていました。僕は断固として入れようということだった。国鉄の労働組合をやっていた執行委員の西川さんというのも「これはやらなきゃならん。こういういい人は入れてやらなければいけない」と言って大論争になり、採決までやって決めた。それで彼女を候補に出して当選させました。僕

が事務局長になって当選させた。それを持ってきたのが貴島さんです。その貴島さんの奥さんとPTAで一緒だったらしいのです。そういうことで貴島さんの申し出で市会議員を立て、何期も当選させました。

そういうこともあり、実は社会党の中では江田派です。貴島さんは政審会の事務局長です。理論家ですから、江田さんの論文を彼が書くわけです。だから、思想的に非常に優れている。貴島さんには勉強させてもらいました。人間的には、僕は貴島さんには非常に熱い思いを持っています。

(続く)

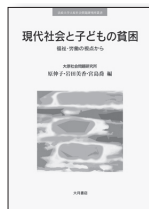
子どもの貧困を生む構造・制度を多面的に論証

法政大学大原社会問題研究所叢書

現代社会と 子どもの貧困

福祉・労働の視点から A5判・4500円

法政大学大原社会問題研究所／
原伸子・岩田美香・宮島喬 編



先進国中で最悪ともいわれる子どもの貧困。福祉制度や支援のあり方、母親の就労環境、障害など複合的な要因を分析。アメリカ・イギリス・フランスなど諸外国の状況、歴史的事例も含めた複眼的な論考をもとに解決の道をさぐる。

視点を変えると異なる日本が見えてくる

歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史

久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵 編 A5判・2800円

姉妹編 歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史
三成美保・姫岡とし子・小浜正子 編 2800円

沖縄に根ざし、新たな文化の創造をめざす

沖縄ジェンダー学2

法・社会・身体 of 制度

喜納育江・矢野恵美 編著 A5判・3400円

文系大学院生必携、研究・就職に役立つ1冊

人文・社会科学系大学院生の キャリアを切り拓く

佐藤裕・三浦美樹・青木深／一橋大学学生支援センター編著

税別価格 東京都文京区本郷2-11-9
電話 03 (3813) 4651 (代表)

大月書店

メールマガジン配信中(詳細はHPで)
<http://www.otsukishoten.co.jp>